

南海トラフ地震被害

―江戸時代の記録から―

木下 浩良

南海トラフ地震は、駿河湾から日向灘沖にかけてのプレート境界を震源域として、百年から百五十年間隔で繰り返して発生してきた大規模地震である。

前回の南海トラフ地震とされるのが、昭和十九年(一九四四)昭和東南海地震及び昭和二十一年(一九四六)昭和南海地震である。この両地震が発生してから七十年以上が経過した現在、両地震とも小規模でもあったことから、次の南海トラフ巨大地震発生との切迫性が高まってきている、とは気象庁からの報である。

筆者も最近、高野山における南海トラフ地震の被害を問われる機会が多くなった。その都度、「高野山では地震被害の記録は見当たりません」と返答するようにしている。

それは、希望的観測で話をしているのではなく、歴史的にそのように実証されるからで、ここにその根拠となる史料を紹介したい。

それが、享保四年(一七一九)に成った『高野春秋編年輯録』(略して『高野春秋』)の記述である。この史料は、弘仁七年(八一六)の高野山開創から享保三年(一七一八)までの歴史を編年体で述べたもので、大変便利な文献となっている。古い時代の記載は検討を要する部分が多いものの、成立年に近い記述ほど正確な内容となっている。

編者は春潮房懐英で、彼の生年は寛永十九年(一六四二)没年は享保十二年(一七二七)七月二十一日であった。筑後国久留米(福岡県久留米市)の祇園寺で出家して寛文三年(一六六三)高野山に登り、享保二年(一七一七)に第二八六世高野山検校となった学僧であった。翌年の享保三年(一七一八)には、検校を辞している。ちょうど高野山は学侶方と行人方との闘争の最中で、懐英は学侶方の立場から幕府に陳述して勝訴に導いたとされている。

『高野春秋』を懐英が編纂した目的は、まさに学侶が勝利したことを歴史的に実証したいがためのもので、学侶の立場で記された歴史書であった。一般的に、有史以降の南海トラフ地震で巨大で最大なもの、宝永四年(一七〇七)十月四日に起きた宝永地震とされている。この時の地震被害の様子を懐英は以下のように、その『高野春秋』の中で記している。宝永四年(一七〇七)は懐英が検校になる十年前である。まさに、懐英は歴史的災害の証人であった。

四日。申上刻、畿内南海道大地震。山崩、海水簸湧。濱村数万人溺ラス。後日、予紀濱ヲ歴覽。村人二尋聞ク。語りて曰ク。申下刻に海水漲来、高四五丈。千家万家、漂浪。而後、湖水曳去。則ち海底、陸地を見る如し。此の如く、海湖来曳すること三度。万民、山に裏り。大船、岳に止め。湖人、乱麻の如し。然ども、野山の中は石塔倒れず。院宇、傾き無し。これに加え、奥院、御広壇参詣人積砂為塔之重石も、安然、崩倒せず。旧損破毀

『高野春秋』を懐英が編纂した目的は、まさに学侶が勝利したことを歴史的に実証したいがためのもので、学侶の立場で記された歴史書であった。一般的に、有史以降の南海トラフ地震で巨大で最大なもの、宝永四年(一七〇七)十月四日に起きた宝永地震とされている。この時の地震被害の様子を懐英は以下のように、その『高野春秋』の中で記している。宝永四年(一七〇七)は懐英が検校になる十年前である。まさに、懐英は歴史的災害の証人であった。

(激しく響き渡る雷)の大きな鳴動を立てて、宝永噴火口より大噴火したこと。火山灰が三日間に渡り降灰したこと。降灰の量は場所により違って、多い所で火山灰が積もった高さは百五十センチから百八センチ、あるいは三十センチから六十センチに及んだこと。噴火から三日間は昼間でも暗く、提燈が必要だったことなどを記している。参考までに紹介する。

廿三日、富士山大鳴動、迅雷の如し。而後、東面八分許り自山の出火、焼砂降フルこと三日夜。東方三十里程、遠近の隧道降砂に厚薄あり。あるいは五六尺。あるいは一二尺。芝高野屋敷積砂三四寸に及ぶ。なかんずく、富士下村、原、吉原等駅路は、昼行旅人挑燈用いること、三日夜也。

この記事は、懐英が実際に被害地に赴き見聞きしたことへの報告であって、非常に信憑性が高く極めて貴重な記録である。山は崩れ、海岸の村々には十二メートルから十五メートルにも及ぶ四階から五階建てのビルの高さの津波が三回押し寄せて、家々は波にのまれて流され、犠牲者は数万人に及んだことを明記している。その一方、高野山では全く地震の被害がなかったことに、懐英は驚きをもって記しているのである。奥之院の石塔で

倒れるものではなく、破損していた木造の霊屋も倒壊することなく、高野山内の塔頭寺院の建物被害もなかったと報じている。

史料の文中にある、「奥院、御広壇参詣人積砂為塔之重石も、安然、崩倒せず」とはいかなる塔のことを示しているのか分からないが、推察すると賽の河原の積み石のような、自然の小石をいくつか積んで塔に見立てたものかと考える。『法華経』にも「童子の戯れに沙を聚めて仏塔を為す」とある。「御広壇」とは奥之院の御廟前の御所の芝のことか

と推察される。当時の高野山参詣の人たちの、大師信仰の一端を垣間見れる貴重な記述と考えるが、その推理が許されるのならば、そのような積み石も倒れることはなかった、と懐英は述べているのである。高野山における地震被害報告はゼロだったと言っているのである。

高野山は、緑泥片岩の岩盤の上に形成された宗教都市である。そのため、雨水も地下に流れることもなく、高野山は山頂にありながら水が豊富な「水の都」であるが、この岩盤のおかげで、地震被害もなかったものと考ええる。

おそらく、宗祖弘法大師は高野山のこのような特性を充分に分かった上で、高野山を開創されたものと考ええる。大師は高野山周辺の原始宗教者である後の行人方となる人々との交流の中で、高野山

を開創したことは度々の機会に申していることである。このことは、筆者の師匠である日野西眞定先生や、さらに日野西先生の師匠である五来重先生が既に指摘されている通りである。大師はそのような先人の宗教者から、高野山の素晴らしさを教示されたと推察することは想像するに難くない。詳細については別に稿を改めて述べてみたい。大師は思想面も含めて現代人に近い、しかも理科系の人物であったことも指摘したい。

なお、宝永地震の翌月二十三日は富士山が噴火して、その被害も甚大であったが、このことも懐英は以下のように『高野春秋』に記している。江戸の芝の高野屋敷(現在の高野山東京別院)の被害について、火山灰が九センチから十二センチ程積もったことを記録している。富士山は迅雷

高野山の歴史と文化

― 弘法大師信仰の諸相 ―

木下 浩良 著

高野山大学総合学術情報センター
日本山岳権威学会監修

好評発売中

A5判 全三冊 買
価格二、七五〇円(税別)送料四〇〇円

この記事は、懐英が実際に被害地に赴き見聞きしたことへの報告であって、非常に信憑性が高く極めて貴重な記録である。山は崩れ、海岸の村々には十二メートルから十五メートルにも及ぶ四階から五階建てのビルの高さの津波が三回押し寄せて、家々は波にのまれて流され、犠牲者は数万人に及んだことを明記している。その一方、高野山では全く地震の被害がなかったことに、懐英は驚きをもって記しているのである。奥之院の石塔で倒れるものではなく、破損していた木造の霊屋も倒壊することなく、高野山内の塔頭寺院の建物被害もなかったと報じている。

プラタモリ高野山編に出演以来、民放テレビ高野山特集の監修、講演会・現地講座でひっぱりだこの著者が、折々に認めた随想を歴史文化財・高野山大学・時事・信仰の4編に再編。著者の高野山に対する思いを一書にする。(山陰加春夫高野山大学名誉教授推薦)

発行所 **株高野山出版社** TEL 0736-56-2724
FAX 0736-56-3840